

対人依存行動の研究

— 対人依存の自己制御と自己意識、ソーシャルスキル、及び対人適応感との関係の検討*1 —

西 川 隆 蔵

要 約

本研究は依存行動を適応的観点から実証的に検討する一環として、現実生活における対人依存行動を主張・実現と抑制・制止という2つの自己制御の側面からとらえようとするものである。今回は大学生を対象にして、対人依存行動質問紙を作成し、日常的な対人依存における自己制御の様相を明らかにすることを目的とした。結果として、自己制御の表出と抑制の2側面に関して、相対的に抑制の側面が自己評価や適応の良さに関連していることが示唆されたが、性差、制御類型と自己意識との関連など、今後さらに被験者数を増やして、検討する必要がある。

問 題

従来、学校や家庭での教育では、依存すること、援助を求めることを幼児的なこととして否定的にとらえる傾向があったが、近年の発達研究では、自立という現象が、依存の変形または成熟した状態であるとする考え方がとられるようになってきている（永野，1971；高橋，1968ab，1970；渡辺，1990；福島，1993）。たとえば高橋（1968a，b）は、自立にともなう潜在的なメカニズムとして依存性の発達の変容をとらえるとともに、健康な成人においても依存欲求が当然としてあり、それが暗黙のうちにも充足されることが自立には必要だと述べている。このような依存行動の発達変化は、愛着理論や精神分析理論の立場にたつ欧米の研究者によっても指摘されており（Ainsworth，1976；Rothbard & Shaver，1994；Winnicott，1965；Parens & Saul，1971）、たとえば精神分析的立場からは、幼児期最早期に必須の依存から、情動的に自分を信頼できるようになる中間的段階を経て、成人の対象関係において互恵的な相互依存関係が達成されるといった指摘がある（Parens & Saul，1971）。また愛着理論の立場からは、社会的適応度が高いとされる安定（secure）タイプはストレス下での対処方略として、愛着対象からの援助を積極的に活用することが指摘されている（Ainsworth，et al，1978；Hazan & Shaver，1987；Simpson，Rholes，& Nelligan，1992；Mikulnicer & Fiorian，1995）。

依存行動の発達の变化が強調されるようになった背景には、「自立＝非依存」が文化的に偏った理念型のとらえ方であるという事実の再認識があり、今やアメリカにおいてさえも、「分離・独立」

を理想とする個人主義的な自己認識のあり方への懐疑がみられ、「自立した自己」は「孤立した自己」ではないのかという意見さえみられるし (Bellah, et al, 1985)、むしろ依存傾向の欠如や依存不安が適応上問題を持つことが指摘されてもいる (Bandura & Walters, 1959)。特に最近のソーシャルサポートに関する研究報告の中には、ソーシャルサポートの利便性や満足度が長期間にわたって安定しており、知覚されたソーシャルサポート (perceived social support) が受容性の感覚といったパーソナリティ要因を意味し、その高さは社会的スキルや自己効力感を反映するのではないかといった指摘や (Sarason, Pierce, & Sarason, 1990; 和田, 1991)、実際に知覚されたサポートのレベルの高い者は低い者よりも自己評価が肯定的であること、自尊心の低い者は高い者よりも、知覚されたソーシャルサポートのレベルが低いという報告がある (Dunkel-Schetter & Bennett, 1990)。また求援助行動 (help seeking) は、概念的には自律的 (autonomous) なものと依存的 (dependent) なものの2つに分類され、前者は自律性を維持する形で動機づけられていて、自分自身で問題解決をするために他者の援助を求める行動であるのに対して、後者の場合は受動性と自己効力感の欠如から生じていて、自分のために問題を解決してくれると信じる他者への依存行動だとされる (Nadler, 1998)。求援助行動の研究は自律的求援助行動と依存的求援助行動とを操作的にいかん識別していくかという方法論的な問題が残されているものの、求援助行動は否定的な意味での受動的依存的な行動にのみ関連づけられるのではなく、むしろ積極的なストレス対処方略とつながる活動的な社会志向性を意味することが示唆されている (Amirkhan, Risinger, & Swickert, 1995; Nadler, 1998)。

以上のような研究諸知見からしても、「真」の自立のためには依存や求援助の社会的スキル (social skill) が必要であると考えの方がより現実的で実践的な見方といえ、自立のプロセスは「個として生きる人間の強さ」から、「関係の中で生きる人間の強さ、しなやかさ」へと視点を変える必要があるように思われる。特に日本人の場合、間人主義 (浜口, 1982) や相互依存的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) で指摘されるように、相互依存的な関係を志向し、その実現に満足感や安定感を求める傾向があるだけに、欧米の社会以上に、社会的能力としての依存スキルが適応を強く規定していることを示唆する意見も多い (小此木, 1968; 土居, 1975)。

しかしながら、従来の依存性研究を概観してみると、そのほとんどが過剰な依存性あるいは、依存的パーソナリティの因果論的記述や他のパーソナリティ要因との関連を検討したものであり (Hirschfeld, et al, 1977; Birtchnell, 1988; Bornstein, 1992, 1993; Pincus & Gurtman, 1995; Bornstein, Riggs, Hill, & Calabrese, 1996)、依存行動を適応的観点から実証的に検討した研究は報告されていないのが現状である。本邦では、辻 (1970)、関 (1982) によって、適応上肯定的な意味をもつ依存性についての検討がなされてはいるものの、方法論的には従来の特性論的な立場からの相関研究の範疇にあると言える。そして、このようなアプローチでは、先に述べた社会的スキル、あるいはストレス対処方略としての依存行動や求援助行動の適応的機能を十分にと

らえることは困難なように思われる。

そこで、本研究では、単に依存性の高低を問題とするような特性論的アプローチではなく、現実の生活場面で依存感情や依存欲求をいかに表出するか、いかに抑制するかといった自己制御 (self-regulation) のあり方を検討してみることにする。この自己制御とは、一般的に自分の欲求や意志にもとづいて自発的に行動調整する力とされるが (Thorensen & Mahoney, 1974; 新名, 1991)、柏木 (1988) はこれには自己主張的制御と自己抑制的制御の2つの側面があるとする。自己主張的制御とは、「自分の意志や欲求を明確に持ち、それを他人の前で表現し主張すること」であり、自己抑制的制御とは「集団場面で自分の意志や欲求を抑制・制止しなければならないとき、これを抑制すること」である。言うまでもなく、依存行動においても、このような自己制御の2つの側面は認められるわけで、頼む、求めるという形で他者に依存する状況や、逆に依存したくても、それを口に出さずに我慢する状況などは容易に想像できる。特に自己主張的側面として、人に頼りたくはなくても、援助を求めることが必要な状況もあるだろう。また「甘えたいのに甘えられない」という神経症的心性やこだわり、過剰な依存性や依存性人格障害などは、自己主張と自己抑制の両機能の未熟さや障害としてとらえることができよう。

さて発達心理学的観点からすると、依存行動の自己制御がクローズアップされるのが青年期であろう。すなわち、青年期は自己意識の高まりとともに人間関係の構造も変化し、親や教師への依存は否認される傾向にあり、友人関係を中心とした外的世界での依存関係の比重が大きくなるからである。そこでの依存関係は家庭外での居場所として機能し、彼らの適応や自立過程に及ぼす影響力は大きいことが推測される。このような依存を自己制御するという社会的能力、あるいは社会的スキルは青年期にさらに発達し、それは対人関係についての自己効力感 (self efficacy) やコンピテンスの認知にも関係して、日常生活における満足感や適応感を規定する大きな要因であることが推測される。また、自己制御の未熟さは、仲間への過剰な依存や一体化とつながり、仲間の離反をまねき、その孤独感や孤立感が依存性を高めるであろうし、逆に過剰な分離意識は、自己への執着や自己絶対化を生じさせ、自己中心的でわがままな依存行動となったり、他者への依存を断ち切り、孤立化するということもあるであろう。

Table 1 依存内容の分類

-
- a. 一緒にすごしたり、何かを一緒にすることを求める。
 - b. 評価されたり、注意や関心を向けてもらふことを求める。
 - c. 金銭、物を借りる、もらふなどの援助を求める。
 - d. 自分の代わりに何かをしてもらふ、仕事を頼む、協力を求める。
 - e. アドバイス、情報を求める。
 - f. 保証や心の支えを求める。
-

以上のことから、本研究は依存行動^{*2}を適応的観点から実証的に検討する一環として、現実生活における対人依存行動を主張^{*3}・実現と抑制・制止という2つの自己制御の側面からとらえようとするものである。今回は、大学生を対象にして、対人依存行動質問紙を作成し、それによって規定される制御行動の様相と自己意識、ソーシャルスキル、ならびに対人適応感との関係を検討することを目的とする。

調査1

対人依存行動質問紙（Interpersonal Depending Experience Questionnaire：IDEQ，以降 IDEQ と略記）を作成するとともに、それによって規定される対人依存の表出と抑制という2つの側面と特性論的な立場から規定される依存性との関係を明らかにする。

方法

IDEQの作成 質問項目の作成においては、大学生というポピュレーションの特性を十分に考慮しながら、具体的な行動項目を幅広く集めるのが望ましいと考えられた。そこで、予備調査として、国立K大学と私立T女子大学の大学生258名（男子98名、女子160名）から「他者への依存エピソード」を収集した。その際に依存の自己制御には、「人を頼りにしたり、援助を求めたい気持ちはあるが、それを我慢する」といった自分の抑制的側面と、「依存したいこと、援助を求めたい気持ちを表現する」といった自分の主張的側面があることを説明し、「自分の依存欲求を口に出して、援助や助けを求めた出来事（表出エピソード）」と「人を頼りにしたり、援助がほしいという気持ちはあっても、それを口に出さず、我慢した出来事（抑制エピソード）」について、現在の大学生活、高校時代、中学時代における記述を求めた。そして収集したエピソードを依存対象、依存内容別に分類し、出現頻度の高いエピソードを参考に出発項目として、依存表出項目39個、依存抑制項目21個を作成した。なお収集したエピソードの中には、恋人への依存行動も数個認められたが、恋人の有無によって、依存表出、抑制の項目の合計得点に影響を及ぼすと考えられたので、これらの項目は採択しなかった。また依存内容において、特定の行動に偏りが生じないようにするために、高橋（1968）、Maccoby & Masters（1970）の依存の5様式、Tardy，（1985）、和田（1989）のソーシャルサポートの内容とネットワークの枠組みを参考にして、Table 1の分類の内のどれか一つが少なくとも反映されるようにした（複数の領域にまたがる依存項目もある）。

依存性についての測定尺度 高橋（1970）による依存性質問紙項目から、①ともにあることを求める、②注意を向けてもらうことを求める、③助力を求める、④保証を求めるの4つの依存内容に該当する13項目を選んだ。回答については、「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で評定するものである。以降、これらの質問項目を依存性尺度と呼ぶ（Table 6 参照－得

点範囲は13点から65点)。

手続き 国立 K 大学の学生357名 (男子146名、女子210名) を対象として、IDEQ 計60項目と依存性についての13項目について回答を求めた。なお IDEQ については、最近の3ヶ月内の経験として「全くなかった」「あまりなかった」「あった」「たびたびあった」の4段階での評定を求めた (分析の際には、「たびたびあった」を4点、「あった」を3点、「あまりなかった」を2点、「全くなかった」を1点として、計算した)。調査は2003年4月に実施された。

結果

IDEQ の項目の因子分析 IDEQ の資料について、主成分分析を行ったところ、第1主成分には依存抑制の項目、第2主成分には依存表出の項目がそれぞれ高い負荷を示した。そこで第1主成分に.4以上の負荷を示した依存抑制の21項目、第2主成分に.4以上の負荷を示した依存表出の28項目について、別々に因子分析を行った。それぞれ3因子から7因子を想定して、主因子法により因子分析を行ない、そして各因子への重複項目数、寄与率、因子の解釈可能性を検討した結果、両項目群ともに4因子解を採用した (全分散内の説明率は、依存表出の4因子で46.29%、依存抑制の4因子で57.14%)。そして因子解の回転については、因子間の相関が高いことが予想されたので、Promax 回転を用いた。Table 2, 3 はその結果得られた負荷量の高い項目 (.40以上) と各因子の固有値と説明される分散の%を示したものである。Table 4 は依存表出と抑制の各4因子の内容とそれらの項目での信頼性係数である。

依存表出の因子 I (Table 2) は、依存対象が親であり、依存内容が Table 1 の a. から f. の全ての領域にわたっている。因子 II (Table 2) は、依存対象が友だちであり、依存内容が Table 1 の c.d. の経済的、物質的、道具的援助やサポートを求めるといったことである。因子 III (Table 2) は、依存対象が親以外の人であり、依存内容は主として Table 1 の d.e. の道具的サポート、援助や情動的援助を求めるといったことである。因子 IV (Table 2) は、依存対象が友人であり、依存内容が Table 1 の a.b.f. の一緒にすごしたり、つきあってもらう、注意を向けてもらう、保証や心の支えを求めるといった情動的サポートを求めることである。

次に依存抑制の因子 I (Table 3) は、依存対象が親以外の学校の先生、町の人であり、抑制された依存内容としては Table 1 の c.d.e. の道具的サポート、情動的援助を求めるといったことである。因子 II (Table 3) は依存対象が親であり、抑制される依存内容が Table 1 の b.d.e.f. といった道具的サポート、情動的、情動的サポート、援助を求めるといったことである。因子 III (Table 3) は依存対象が友人であり、抑制される依存内容が Table 1 の b.c.f. といった情動的サポートや物質的援助を求めるといったことである。因子 IV (Table 3) は依存対象が親以外の友人や町の人であり、抑制される内容は Table 1 の c.d. の経済的、物質的、道具的援助やサポートを求めるといったことである。これらを総合すると、依存の表出、抑制の両面ともに依存対象によって因子が構成されており、各因子の内容を

Table 2 依存表出項目の因子分析結果 (Promax 回転後の因子負荷量 .40 以上の項目)

項 目	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
5. 親に自分の買い物などの用事につきあってもらった。	.715			
27. 欲しいものがあった、親に買ってもらった。	.689			
33. 食べたいものがあった、親にたのんで用意してもらった。	.682			
57. わからないこと、出来ないことを親にたのんでしてもらったり、教えてもらった。	.617			
12. 親にたのんで、自分の用事をかわりにやってもらった。	.586			
41. 家の人にたのんで、持ち物を貸してもらった。	.578			
9. うれしいことがあって、親に話を聞いてもらった。	.528			
29. 友達にたのんで、食べ物や飲み物をごちそうしてもらった。	.638			
18. 友達にたのんで、持ち物をゆずってもらったり、プレゼントをもらった。	.575			
31. 宿題やレポートを、友達にたのんで、見せてもらったり、写させてもらった。	.549			
28. 友達にたのんで、授業のノートなどを貸したり、コピーさせてもらった。	.547			
42. お金の持ちあわせがなく、友達に借してもらった。	.490			
47. 自分がするべきことや用事を、友達にたのんで、かわりにやってもらった。	.459			
50. 自分の活動や用事を、友達にたのんで、手伝ってもらった。	.437			
44. 忘れ物をして、友達に借してもらったり、友達と共同で利用させてもらった。	.431			
62. 学校やクラブのことでわからないことや出来ないことを先生に教えてもらった。			.657	
58. クラブやサークルの先輩に悩みの相談にのってもらったり、アドバイスしてもらった。			.625	
64. クラブやサークルの先輩にわからないことや出来ないことを教えてもらった。			.579	
61. 町や駅で、知らない人にものをたずねたり、たのみごとをした。			.550	
60. 友達にわからないことを教えてもらったり、アドバイスしてもらった。			.464	
2. 友達にたのんで、映画やコンサート、遊びにつきあってもらった。				.680
1. 友達にたのんで、食事や登下校などを一緒にしてもらった。				.658
6. 友達にたのんで自分の買い物や用事につきあってもらった。				.593
10. 友達にたのんで、悩みごとやグチを聞いてもらった。				.523
固 有 値	7.36	2.38	1.65	1.57
分 散 の %	26.30	8.48	5.90	5.61

Table 3 依存抑制項目の因子分析結果 (Promax 回転後の因子負荷量 .40 以上の項目)

項目	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
53. 先生に相談したいことがあったが、言わなかった。	.901			
54. 先生に助けてほしいことがあったが、言わなかった。	.864			
66. お店、病院、役所などで、相談したいことがあったが、言わなかった。	.455			
25. 親にたのみたいこと、してほしいことがあったが、言わなかった。		.779		
43. 親に話を聞いてほしいと思っただが、言わずにいた。		.706		
26. 友だちに用事を手伝ってほしいが、頼まなかった。		.555		
20. 親に買ってほしいもの、支払ってほしいものがあったが、言わずに我慢した		.539		
38. 親に相談したいことがあったが、言わなかった。		.539		
13. つらい気持ちや不安なことを親に聞いてほしかったが、話さないでいた。		.471		
4. 悩み、クチなど、友達に話を聞いてほしかったが、話さないでいた。			.898	
3. 友達に励ましてほしかったが、言わなかった。			.782	
15. 自慰話や楽しい出来事を、友達に聞いてほしいと思っただが、話さなかった。			.493	
70. クラブの仲間に、用事をたのみたかったが、言わなかった。				.607
59. 友達にゆずってほしいものがあったが、言わなかった。				.543
67. 友達に自分のかわりに用事をしてもらおうと思っただが、やめた。				.525
69. 町や電車の中で助けがほしいことがあったが、言わなかった。				.500
固有値	7.89	1.80	1.22	1.09
分散の%	37.59	8.56	5.79	5.21

Table 4 IDEQ 因子内容 (α係数)

依存表出	
因子 I	H1 親への依存表出 (.82)
因子 II	H2 友人への道具的援助希求 (.81)
因子 III	H3 親以外の人からの情動的援助の希求 (.73)
因子 IV	H4 友人への情緒的依存表出 (.75)
依存抑制	
因子 I	Y1 親友人以外の大人への依存の抑制 (.83)
因子 II	Y2 親への依存の抑制 (.83)
因子 III	Y3 友人への情緒的依存の抑制 (.78)
因子 IV	Y4 友人仲間からの道具的援助希求の抑制 (.73)

Table 5-1 男女別、依存表出・抑制の各尺度得点の平均値の比較 ():標準偏差

	男子	女子	t 値
依存表出			
H1	6.60 (4.50)	8.91 (4.87)	-4.55***
H2	9.00 (5.09)	7.70 (4.38)	2.50*
H3	5.23 (3.57)	5.49 (3.36)	n.s.
H4	5.24 (3.20)	5.74 (3.19)	n.s.
依存抑制			
Y1	1.56 (2.16)	1.58 (2.15)	n.s.
Y2	4.44 (4.17)	4.83 (3.83)	n.s.
Y3	2.93 (2.53)	3.21 (2.18)	n.s.
Y4	2.07 (2.35)	2.12 (2.43)	n.s.

*p<.05 ***p<.001 両側検定

Table 5-2 依存表出・抑制の各尺度得点間の相関 (Spearman)

		依存表出			
		H1	H2	H3	H4
依	Y1	.22**	.38**	.36**	.22**
存	Y2	.30**	.32**	.35**	.28**
抑	Y3	.16**	.19**	.22**	.20**
制	Y4	.34**	.49**	.51**	.26**

**p<.01 両側検定

まとめると Table 4 のようになる。

IDEQ 下位尺度得点の性差と尺度間相関 Table 2, 3 に示した各因子の構成項目を下位尺度項目として依存表出と依存抑制の各尺度得点間の相関係数 (Spearman) を示したものが Table 5, 6 である (以降、依存表出の下位尺度を H1, H2, H3, H4、依存抑制の下位尺度を Y1, Y2, Y3, Y4 と呼ぶ)。

まず、下位尺度得点の性差について調べたところ、男子は女子よりも H2 の得点が高いことから、友人への道具的援助希求が多いこと、一方女子は男子よりも H1 の得点が高いことから、親への依存表出が多いことが明らかになった (Table 5-1)。次に下位尺度得点間の相関 (Spearman) を調べたところ、H2, 3 の得点と Y4 の得点との間に中程度の正の相関が認められ、他の相関係数と比較しても相対的に高いことが明らかになった。その他、H2, 3 の得点は Y1 と Y2 の得点とも .3 以上の正の相関が認められた (Table 5-2)。中程度以上の相関関係 (.3 以上) をみてみると、Y1, 2, 4 が H2, 3 と関連することが大きな特徴であり、このことは友人、及び家族以外の対

象への依存行動において、表出傾向と抑制傾向とが対立的な関係にあるのではなく、表出するだけではなく、親や友人への依存を抑制する傾向にある者が多いことを示唆している。特に、H2 と Y4 との相関、H3 と Y4 との相関が高いことから、親以外の対象への依存表出と親への依存抑制とが関係すること、そして友人への物質的、経済的、道具的サポート面での依存表出と親への経済的、物質的依存の抑制とが関係することが示唆される。

IDEQ 下位尺度得点と依存性尺度得点との関係 まず依存性尺度の13項目について、因子分析を行った。それぞれ2因子から5因子を想定して、主因子法により因子分析を行ない、そして各

Table 6 依存性尺度項目の因子分析結果 (Promax 回転後の因子負荷量)

項	目	因子 I	因子 II	因子 III
9.	困っている時や悲しい時には、だれかに気持ちをわかってもらいたい	.825		
7.	なにかする時には、だれかに気をくばってもらったり、はげましてもらいたい	.762		
10.	人から、「元氣ですか」などと気をくばってもらいたい	.648		
3.	病気の時や、ゆううつな時には、だれかに同情してもらいたい	.604		
8.	なにかにつけて、だれかに味方(みかた)になってもらいたい	.568		
1.	うれしいこと、楽しいことは、まず、だれかに報告したい	.326		
6.	できることなら、いつも、だれかと一緒にいたい		.979	
2.	できることなら、どこへ行くにも、だれかと一緒に行きたい		.771	
11.	悪い知らせ、悲しい知らせなどを受けとる場合には、だれかに一緒にいてもらいたい		.357	
12.	なにか、まよっている時には、だれかに「これでもいいですか」と聞きたい。			.832
13.	重要なこと、たいせつなことを決める時は、いつも、人の意見をききたい			.698
5.	一人で決心できそうもない時は、だれかの意見や考えにしたがいたい			.474
4.	むずかしいことをする時には、できたらだれかと一緒にしたい			.384
個有値		4.50	1.55	1.35
分散の %		34.60	11.93	10.39

因子 I 他者からの配慮、気づかいを求める傾向 . . . 尺度 A
 因子 II 情緒的支えを求める傾向 . . . 尺度 B
 因子 III 判断の他律性 . . . 尺度 C

Table 7 依存表出・抑制の各尺度得点と依存性尺度得点との相関 (Spearman)

	依存性尺度			
	Total	尺度 A	尺度 B	尺度 C
依存表出				
H1	.26**	.24**	.19**	.14
H2	.21**	.07	.27**	.21**
H3	.21**	.14*	.17*	.20**
H4	.38**	.25**	.35**	.29**
Total	.34**	.21**	.32**	.29**
依存抑制				
Y1	.15*	.10	.09	.14*
Y2	.15*	.13	.04	.14*
Y3	.17*	.15	.09	.14*
Y4	.20**	.16*	.21**	.12
Total	.21**	.18*	.11	.18*

*p<.05 **p<.01 両側検定

相関が認められ、依存性の3つの下位尺度得点の合計点とH4との間にも有意な中程度の相関が認められた。その他、統計的には有意な相関が多数認められはするが、どの値も低く、特に依存抑制の下位尺度得点の相関係数は低いと言える。このことから、IDEQで操作的に規定される依存の表出と抑制という行動的側面と特性としての依存性とはあまり関連せず、依存性が、直接的に実際の対人依存行動を規定するものではないと考えられる。

調査 2

依存の表出と抑制という依存制御における2つの側面が、個人のライフスタイル、特に現実生活における問題解決行動とどのような関連があるのか検討するために、調査1で作成したIDEQ(40項目)により規定される下位尺度得点とストレスコーピング、社会的スキルとの関係を明らかにする。

方 法

ストレス・コーピングの測定 Lazarus & Folkman (1984) によつて作成され、本明寛他により翻案されているストレス・コーピング尺度を用いた。

社会的スキルの測定 菊池 (1988) により作成された尺度を用いた。この尺度はGoldstein, Sprafkin, Gershaw & Klein (1980) の50項目からの測定リストに基づいたもので、「初歩的スキル」「高度なスキル」「感情処理のスキル」「ストレス対処スキル」「計画のスキル」の6つの領域にわたるスキルを測定するもので、18項目で構成されている。

評定は「いつもそうだ」「たいていそうだ」「どちらともいえない」「たいていそうでない」「いつもそうでない」の5段階で、得点範囲は90点から18点で、得点が高いほど社会的スキルを身に

因子への重複項目数、寄与率、因子の解釈可能性を検討した結果、3因子解を採用した。そして因子解の回転については、因子間の相関が高いことが予想されたので、Promax 回転を用いた。Table 6 は各3因子の項目と負荷量を示したものである。

Table 6 に示した各因子の構成項目を各々、尺度 A (因子 I)、尺度 B (因子 II)、尺度 C (因子 III) の尺度項目として尺度得点を算出し、IDEQ 下位尺度得点との相関 (Spearman) を調べたところ (Table 7)、依存性の尺度 B 得点と H4 との間に中程度の

つけていることを示す。以降、この尺度項目を SSS (Social Skills Scale) と略記する。

手続き 国立 O 大学の学生124名 (男子31名、女子93名) に、IDEQ、SSS、ストレス・コーピング尺度を実施した。

IDEQ の各尺度得点の時間的変動を調べる目的で、同じ対象に対して、さらに3ヶ月間隔で2度 IDEQ を実施した。調査は2003年6月に実施された。

結 果

IDEQ 下位尺度得点と SSS、ストレス・コーピング尺度の各尺度得点との相関 (Spearman) を調べたところ (Table 8)、依存抑制の Y1 と Y3 の得点と SSS との間に有意な正の相関が認められ、親以外の友人などへの依存の抑制と社会的スキルとが関連することが示唆された。次に、ストレスコーピングとの関係では、表出・抑制の各下位尺度得点全てが一貫して社会的支援模索 (See) と正の有意な相関が認められ、特に表出の H4 とは中程度の相関 (.43) が認められた。このように依存表出のみならず、依存抑制の下位尺度とも一貫して正の相関が認められたことから、依存の表出と抑制という制御の方向は反対であるにせよ、これらの下位尺度の得点は共通して、依存や求援助の気持ち、欲求を抱いた頻度を反映するものであることが確認できた。また親への依存表出 (H1) はコーピング下位尺度の内、社会的支援模索以外の尺度とは全く関連がみられない一方で、親への依存抑制 (Y2) はコーピング下位尺度の内の複数の尺度との間に正の有意な相関が認められる。さらに依存抑制の面で、友人への道具的援助希求の抑制 (Y4) が対決を除く他の全てのコーピング下位尺度と正の有意な相関が認められる。これらの結果は、親以外の友人、その他大人等への依存表出、援助希求、あるいは親への依存を抑制することがストレス対処行動と何らかの関連をもつものに対して、親への依存表出はストレス対処行動とは全く関連しないことを示

Table 8 IDEQ 尺度と各尺度得点との相関 (Spearman)

IDEQ	表 出				抑 制			
	H1	H2	H3	H4	Y1	Y2	Y3	Y4
社会的スキル	-.02	.04	.02	-.01	.27**	.18	.26**	.17
コーピング尺度								
計 画 (Pla)	.02	.01	.22*	.16	.12	.05	.14	.32**
対 決 (Con)	-.01	.08	.10	.12	.08	.15	.15	.14
社会的支援 (See)	.34**	.33**	.31**	.43**	.33**	.35**	.25**	.28**
責任受容 (Acc)	.02	.25**	.24*	.33**	.12	.18	.20*	.28**
自己統制 (Sel)	.09	.13	.14	.06	.13	.27**	.18	.30**
逃 避 (Esc)	.13	.29**	.12	.22*	.15	.27**	.10	.19*
隔 離 (Dis)	.09	.01	-.03	.06	.07	.20*	.16	.25**
肯定評価 (Pos)	.02	.20*	.24**	.19*	.09	.11	.20*	.26**
問題解決志向 (Co)	.09	.25**	.31**	.30**	.21*	.21*	.29**	.40**
情動中心志向 (Em)	.11	.21*	.17	.24*	.06	.34**	.21*	.36**

*p<.05 **p<.01 両側検定

Table 9 IDEQ 各尺度の3時点での得点変動指数*

	H1M	H2M	H3M	H4M	Y1M	Y2M	Y3M	Y4M
平均値	1.74	1.88	1.50	1.28	.80	1.41	1.06	.88
標準偏差	1.20	1.82	.86	.85	.83	1.18	.72	.82
分散	1.44	3.30	.74	.72	.69	1.38	.52	.67

*変動指数の算出方法

3つの時点での尺度得点 (t1, t2, t3) の和/3 = M

H1M ~ Y1M = | M - t1 | + | M - t2 | + | M - t3 | / 3

唆するものである。

IDEQ の下位尺度得点の3時点間の変動については、Table 9 に示すように、3時点での各得点の和を3で割った平均値 M と各時点での得点の差の絶対値の和を3で割った値を各被験者の得点変動指数 (H1M-H4M、Y1M-Y4M) とした。Table 9 に示すように、H1-H4、Y1-Y4の8つの尺度の内、変動指数の平均値が相対的に高いのは H1 と H2 で、Y1 と Y4 の得点変動は相対的に低いことがうかがえる。このことから、依存行動に関して、抑制の側面は表出の側面と比べて、状況要因等による影響が少なく安定していること、親への依存や友人への道具的な依存の表出は抑制の側面に比べると状況依存的で、状況的要因によって、影響されやすいことが示唆される。先に述べたように、Table 8 に示したように依存抑制の側面が社会的スキルと関連することから、依存抑制の側面は社会的スキルへの自信といった要因を反映することがうかがわれる。

調査3

研究1で作成した IDEQ によって規定される依存の表出と抑制の2側面の様相と自己意識及び対人適応との関係を検討する。具体的には、IDEQ の下位尺度の得点パターンから、対人依存行動に関する幾つかの類型を抽出し、各類型における自尊心、自己効力感、対人適応感のレベルを比較することを目的とする。

方法

自尊心の測定 山本、松井、山成 (1982) によって翻案作成された Rosenberg (1965) の尺度10項目を用いた。従来、自尊感情には自他共通した社会的基準による肯定的な自己認知にもとづく場合と、個人内基準を用いての肯定的な自己認知にもとづく場合の2つの内包的意味があるとされ、今回用いる尺度は、後者の立場に立って作成されているものでありね「これでよい」といった自己受容の感情を含むものとされる。評定は「あてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5段階で、合計得点の範囲は10点から50点で、高いほど肯定的な自己認知をしていることを示す。以降、この尺度項目を SES (Self Esteem Scale) と略記する。

自己効力感の測定 成田、下仲、中里、河合、佐藤、長田（1995）が作成している自己効力感尺度を用いた。この尺度は Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs, & Rogers（1982）が作成した23項目尺度を翻案したものであり、中立評定をささむ5件法で回答を求めるものである。これは、自己効力感を人格特性的な認知傾向の観点からとらえることにより、具体的な個々の課題や状況に依存せず、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感の測定を目的としたものである。以降、この尺度項目をSEF(Self-Efficacy Scale)と略記する。

対人適応感の測定 内田（1990）が青年期の全般的な生活感情を測定するために作成した尺度の中から、対人関係についての8個の下位尺度項目を用いた。5段階評定で総得点範囲は8点から40点で、得点が高いほど、自分の対人関係を肯定的に評価していることを示す。以降、この尺度項目をIFS（Interpersonal Feeling Scale）と略記する。

手続き 調査2と同じ国立O大学の学生124名（男子31名、女子93名）を対象にして、IDEQ、SES、SEF、IFSの4種の尺度からなる質問紙冊子を作成し、個別に郵送し回答を得る形で、資料を得た。調査は2003年9月に実施された。

結果

今回被験者となった124名を依存表出と抑制の2つの側面からグループに分類するために、まずIDEQの各尺度得点について、高・中・低の3段階の点数（3, 2, 1）に換算し、その換算点を対象変数として、被験者の階層クラスター分析を行った。クラスター化の方法はワード法を、被験者間の距離の測定方法としては平方ユークリッド距離を用いた。デンドログラム（Fig. 1）の結果を参考にして、おおよそ特徴が明確な7つのグループを抽出した。Table 10は抽出したグループ

Table 10 依存の制御パターンにおける7グループの特徴

グループ	依存制御（表出・抑制）の パターン	自己評価		
		自尊心（SES）	自己効力感（SEF）	対人適応感（IFS）
A群 （14人）	依存表出・抑制ともに少なかった	自尊感情の低い者が多い	自己効力感の低い者が多い	対人適応感の低い者が多い
B群 （7人）	全般的に依存表出が多かった		自己効力感の低い者が多い	対人適応感の低い者が多い
C群 （14人）	友人への情緒的依存表出が多かった		自尊感情の低い者が多い	自己効力感の低い者が多い
D群 （11人）	親以外の人への依存表出が多かった			
E群 （13人）	親への依存表出が多かった	自尊感情の低い者が多い	自己効力感の低い者が多い	対人適応感の高い者が半数を占める
F群 （23人）	依存の表出・抑制ともに多かった		自己効力感の高い者が半数を占める	
G群 （10人）	依存抑制が多かった		自己効力感の高い者が半数を占める	

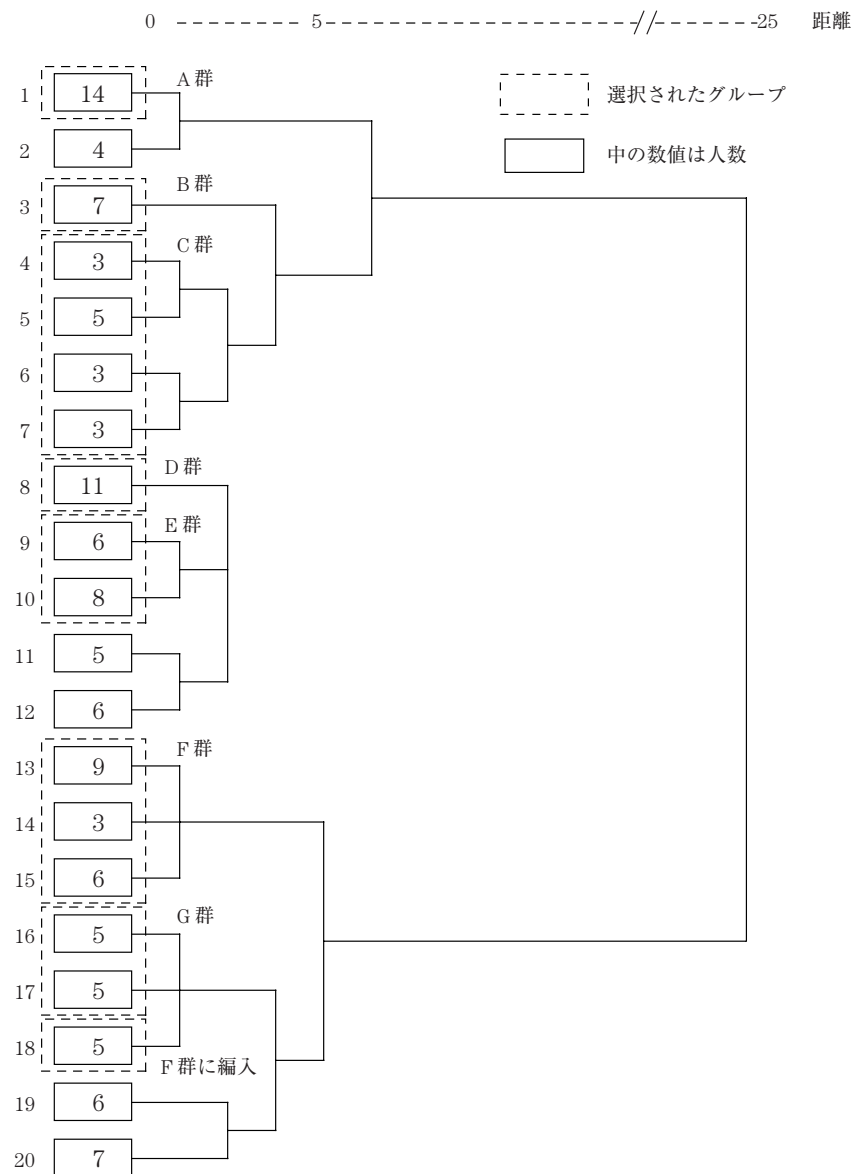


Fig.1 デンドログラムによる7グループの抽出

ブを構成する被験者の IDEQ の尺度得点（換算点）の傾向から、7つのグループの比較を示したものである。A 群は依存の表出、抑制の機会がともに少なかった者のグループで、他者への依存、援助希求が基本的に少ないことがうかがわれる。B 群は親、友人を含めて全般的に依存表出の機会が多かったことが特徴のグループで、C 群は友人に相談にのってもらい、話を聞いてもらうなど、友人への情緒的な依存表出の機会が多かったことに特徴があるグループである。D 群は親以外の友人、大人への依存表出の機会が多かったことに特徴のあるグループで、E 群は親への依存

Table 11-1 7グループにおけるSES得点の高・中・低群の比率

SES	グループ						
	A	B	C	D	E	F	G
L群	35.7% (5)	71.4% (5)	35.7% (5)	36.4% (4)	69.2% (9)	21.7% (5)	0%
M群	42.9% (6)	14.3% (1)	28.6% (4)	45.5% (5)	23.1% (3)	34.8% (8)	50.0% (5)
H群	21.4% (3)	14.3% (1)	35.7% (5)	18.2% (2)	7.7% (1)	43.5% (10)	50.0% (5)

自尊心尺度 (SES) L群：0～24 M群：25～30 H群：31～

Table 11-2 7グループにおけるSEF得点の高・中・低群の比率

SEF	グループ						
	A	B	C	D	E	F	G
L群	46.2% (6)	42.9% (3)	28.6% (4)	36.4% (4)	57.1% (8)	22.7% (5)	0%
M群	30.8% (4)	28.6% (2)	35.7% (5)	18.2% (2)	28.6% (4)	40.9% (9)	40.0% (4)
H群	23.1% (3)	28.6% (2)	35.7% (5)	45.5% (5)	14.3% (2)	36.4% (8)	60.0% (6)

自己効力感尺度 (SEF) L群：0～59 M群：60～70 H群：71～

Table 11-3 7グループにおけるIFS得点の高・中・低群の比率

IFS	グループ						
	A	B	C	D	E	F	G
L群	50.0% (7)	57.1% (4)	42.9% (6)	36.4% (4)	42.9% (6)	21.7% (5)	20.0% (2)
M群	28.6% (4)	14.3% (1)	42.9% (6)	54.5% (6)	28.6% (4)	21.7% (5)	20.0% (2)
H群	21.4% (3)	28.6% (2)	14.3% (2)	9.1% (1)	28.6% (4)	56.5% (13)	60.0% (6)

対人適応感尺度 (IFS) L群：0～14 M群：15～19 H群：20～

表出の機会が多かったことが特徴であるグループである。F群とG群はともに依存を抑制する機会が多かったところに特徴のあるグループで、F群は依存表出の機会も多かったところにG群との違いが認められた。

SES、SEF、IFSの3つの尺度得点については、それぞれ高中低の3群に分類し、IDEQによる7つの類型グループにおける出現頻度の比較を示したのが、Table 11-1, 11-2, 11-3である。この結果から、B群とE群には自尊感情が低い者が多いこと、A群、B群、E群には自己効力感の低い者が多く、F群、G群には自己効力感の高い者が半数を占めること、A群、B群には対人適応感が低い者が多く、一方F群、G群には適応感の高い者が半数以上占めることが認められた。また7つのグループ間のSES、SEF、IFS各尺度得点の平均値の比較を行った結果 (Table 12)、SES

Table 12 7グループにおける SES, SEF, IFS 各尺度得点の平均値の比較

	A	B	C	D	E	F	G	多重比較の結果
SES	1.64	21.43	26.36	26.64	22.23	29.35	33.50	F=3.01* B,E<C,D,A,F,G (Tukey $\alpha =0.05$)
SEF	64.77	64.43	66.64	69.00	60.29	68.14	73.80	F=1.37 E,B,A,C,F,D,G
IFS	17.21	14.71	16.07	15.27	16.79	19.87	20.80	F=1.85 B,D,C,E,A,F,G

*p<.05

得点については、7群間に有意差が認められ (F=3.01, $p<.01$)、B群とE群は他の群よりも自己評価、自己受容度が低いことが示唆された (一元配置の分散分析後、平均値間に有意差が認められた場合の多重比較に際しては、Levene 統計量によりグループ間の等分散性の検定を行い、等分散が保証されたので、多重比較には Tukey 法を用いた。

全体的考察

本研究は依存行動を適応的観点から実証的に検討する一環として、現実生活における対人依存行動を主張・実現と抑制・制止という2つの自己制御の側面からとらえ、大学生を対象にして、対人依存行動質問紙 (IDEQ) を作成するとともに、それによって規定される制御行動の様相と自己意識、ソーシャルスキル、ならびに対人適応感との関係を検討した。

まず、IDEQの下位尺度得点の性差について調べたところ、男子は女子よりも友人への道具的援助希求が多く、一方女子は男子よりも親への依存表出が多いことが明らかになった。下位尺度得点間の相関からは、友人、及び家族以外の対象への依存行動において、表出傾向と抑制傾向とが対立的な関係にあるのではなく、表出するだけではなく、親や友人への依存を抑制する傾向にある者が多いことが示唆された。特に、親以外の対象への依存表出と親への依存抑制とが関係すること、そして友人への物質的、経済的、道具的サポート面での依存表出と親への経済的、物質的依存の抑制とが関係することが示唆され、これらのことは、青年期の対人関係、対人依存行動の構造的変化を如実に示す結果であり、従来からの知見 (高橋, 1968ab) をあらためて支持するものである。さらに、IDEQ下位尺度得点の内、友だちへの情緒的依存の表出を意味するH4の得点のみが、依存性尺度得点と関連しており、全般的に相関の値が低いことから、特性としての依存性と実際の対人依存行動とが直接的に関連しないことが示唆された。

IDEQ下位尺度得点と社会的スキル尺度 (SSS)、ストレス・コーピング尺度の各尺度得点との相関結果からは、親以外の友人などへの依存を抑制することと社会的スキルとが関連すること、依存の表出・抑制の両面とも一貫して、ストレス・コーピングの下位尺度の社会的支援模索と関連がみられた。また親への依存表出は、社会的支援模索以外の下位尺度とは全く関連がみられなかったのに対して、親への依存抑制や親以外の友人、大人への依存表出と依存抑制はストレス・コーピングの下位尺度と何らかの関連がみられたことが特徴であった。これらの結果は、親以外

の友人、その他大人等への依存表出、援助希求、あるいは親への依存を抑制することがストレス対処行動と何らかの関連をもつものに対して、親への依存表出はストレス対処行動とは全く関連しないことを示唆するものであり、親からの分離独立が達成されつつある青年期後期の心理的特質の一端を示すものと考えられる。また IDEQ の下位尺度得点の 3 時点間の変動の結果からは、依存行動の抑制の側面は表出の側面と比べて、状況要因等による影響が少なく安定しており、親への依存や友人への道具的な依存の表出の側面は抑制に比べると状況依存的なものであることが示唆された。

今回被験者となった 124 名について、依存表出と抑制の 2 つの側面から、7 つの典型的なグループを抽出し、各類型における自尊心、自己効力感、対人適応感のレベルを比較した。その結果、依存表出と抑制の両者の機会が多かった被験者グループ (F 群)、依存の表出機会は多くはなかったが、抑制する機会が多かった被験者グループ (G 群) は、他の被験者グループよりも自己効力感、対人適応感が高いという傾向が認められた。また親への依存表出の機会が多かった被験者グループ (E 群) と、親、友人を問わず全般的に依存表出の機会が多かった被験者グループ (B 群) は、他の被験者グループよりも自尊感情が低く、自己効力感や対人適応感も低い傾向が認められた。以上の結果から、全体的な特徴として言えることは、まず親からの分離・独立の達成期にある青年後期においては、他者への依存、援助希求を持ちつつも、それをいかに抑制制御するかがその個人の適応感、あるいは社会的スキルをはじめとした社会適応能力と関連しているということである。また、このことは親への依存表出の機会が多いという状態、状況そのものが、家庭外での対人不適応と裏腹の関係にあることを示す結果と言えなくもない。さらに、被験者グループ F 群が示すように、依存の表出が必ずしも、対人不適応や自己評価の低さにつながるものではなく、依存対象が親ではなく、友人や折々の状況での周囲の人に比重がおかれるようになる時期においては、依存の表出と抑制の両高的なバランスが個人の対人的な適応の良さを反映すると考えられる。

これらのことはあくまでも、推測の闕を出ないものであり、さらに男女別のデータ分析、青年期前半での様相を明らかにすることなども必要であることから、今後のデータの集積と分析が必要であることは言うまでもない。しかし、今回の結果において、従来、「なくさなければならぬもの」「決して表に出してはいけないもの」として、一面的にかつ否定的な意味を付与され捉えられることが多いものであった依存という行動や欲求を、「生きることや成長することの必然」として捉えなおすことの意義、方向性を示すことができた。発達的には、対人関係の中で依存や援助希求の気持ちを、いかに表出し、いかに抑制するかという自己制御の獲得が重要であり、そのような制御スキルの獲得過程の様相を明らかにすること、そしてそれと適応との関連を実証的に明らかにすることが今後の検討課題と言える。

注

- *1 本論文は帝塚山学院大学より、平成15年度共同研究費助成を受けた「対人依存行動の研究」(西川隆蔵、長谷俊彦)の成果の一部である。
- *2 依存行動の定義については、本研究では Table 1 に示した内容とした。
- *3 本研究では、主張することも含めて、相手に依存を求めるという意味で、表出という表現を用いていることにする。

引用文献

- Ainsworth, M.S. 1976 Attachment and dependency: A Comparison. In J.L.Gewirtz (eds.) Attachment and Dependency. Washington, D.C.: Winston.
- Amirkhan, J.H., Risinger, R.T., & Swickert, R.T.J. 1995 Extroversion: A hidden personal factor in coping?. *Journal of Personality*, 63, 189-212.
- Bandura, A.H., & Walters, R.H. 1959 Adolescent Aggression. New York: The Ronald Press, Co.
- Bellah, R.N., Madsen, R., Sullivan, W.M., Swidler, A., & Tipton, S.M. 1985 HABITS OF THE HEART. - Individual and Commitment in American Life - Berkeley: University of California Press. 島蘭進、中村圭志 (訳) 1991 心の習慣-アメリカ個人主義のゆくえ みすず書房
- Birchnell, J. 1988 Defining dependence. *British Journal of Medical Psychology*, 61, 111-123.
- Bornstein, R.F. 1992 The Dependent Personality: Developmental, Social, and Clinical Perspectives. *Psychological Bulletin*, 112 (1), 3-23.
- Bornstein, R.F., Riggs, J.M., Hill, E.L., & Calabrese, C.1996 Activity, Passivity, Self-denigration, and Self-Promotion: Toward an Interactionist Model of Interdependency. *Journal of Personality*, 64 (3), 637-673.
- 土居健郎 1975 「甘え」 雑稿 弘文堂
- Dunkel-Schetter, C., & Bennet, T.L. 1990 Differentiating the Cognitive and Behavioral Aspects of Social Support. In B.R.Sarason, I.G.Sarason, & G.R.Pierce (Eds.) Social Support: :An Interactional View. New York: JOHN WILEY & SONS.Pp.267-296.
- 福島朋子 1993 自立に関する概念的考察-青年・成人及び女性を中心として, 発達研究, 8, 67-87.
- 浜口恵俊 1982 間人主義の社会 東洋経済新聞社
- Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Hirschfeld, R.M.A., Klerman, G.L., Gough, H.G., Barrett, J.Kochin, S.J., & Chodoff, P. 1977 A measure of interpersonal dependency. *Journal of Personality Assessment*, 41, 610-618.
- 柏木恵子 1986 自己制御 (self-regulation) の発達 心理学評論, 26 (1), 3-24.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. 1984 STRESS, APPRAISAL, and COPING. New York: Springer Publishing Company, Inc. 本明寛、春木豊、織田正美 (監訳) 1991 ストレスの心理学-認知的評価と対処の研究 実務教育出版
- Macobby, E.B., & Masters, J.C. 1970 Attachment and dependency. In J.Mussen (Ed.) Carmichael's Manual of Development Psychology, 3d ed. New York: Wiley.
- Markus, H., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

- Mikulnicer, M., & Florian, V. 1995 Appraisal and coping in a real life stressful situation: The contribution of attachment style. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 406-414.
- Nadler, A. 1998 Relationship, Esteem, and Achievement Perspectives on Autonomous and Dependent Help Seeking. In S.A.Karabenick (edi.) STRATEGIC HELP SEEKING: Implications for Learning and Teaching. London ; Lawrence Erlbaum Associate, Inc. Pub.
- 永野重史 1971 人間形成における依存心と独立心 児童心理, 25, 9
- 成田健一、下仲順子、中里克治、河合千恵子、佐藤真一、長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討 - 生涯発達の利用の可能性を探る 教育心理学研究 43, 306-314.
- 小此木啓吾 1968 甘え理論 (土居) の主体的背景と理論構成上の問題点 精神分析研究 14, 14-19.
- Parens, H., & Saul, L.J. 1971 Dependence in Man: A Psychoanalytic Study. New York: International: University Press.
- Pincus, A.L., & Gurtman, M.B. 1995 The Three Faces of Interpersonal Dependency: Structural Analyses of Self-Report Dependency Measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69 (4), 744-758.
- Rosenberg, M 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton University Press.
- Rothbard, J.C., & Shaver, P.R. 1994 Continuity of Attachment across the LifeSpan, In Sperling, M.B., & Berman, W.H. (eds.), Attachment in Adults, Pp.31-71. New York: The Guilford Press.
- Sarason, B.R., Pierce, G.R., & Sarason, I.G. 1990 Social Support: The Sence of Accepttance and the Role of Relationships. In B.R.Sarason, I.R. Sarason, .& G.Y.Pierce (eds.) Social Support: An Interactional View. New York: JOHN WILEY & SONS. Pp.97-128.
- 関 智恵子 1982 人格適応面からみた依存性の研究 京都大学教育学部 心理教育相談室 臨床心理事例研究, 9, 230-249.
- Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R.W. 1982 The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51.663-671.
- Simpson, J.A., Rhooles, W.S., & Nelligan, J.S. 1992 Support seeking and support giving within couples in an anxiety provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 434-446.
- 新名里恵 1991 社会的行動の発達 古畑和孝 (編) 子どもの自己制御の発達 学芸図書 Pp.71-94.
- 高橋恵子 1968a 依存性の発達の研究 1 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 高橋恵子 1968b 依存性の発達の研究 2 教育心理学研究, 16, 216-226.
- 高橋恵子 1970 依存性の発達の研究 3 教育心理学研究, 18, 65-74.
- Tardy, C.H. 1985 Social Support Measurement. *American Journal of Community Psychology*, 13 (2), 187-202.
- Thorensen, C., & Mahoney, M.J. 1974 Behavioral self-control. New York: Holt Reinhart & Winston.
- 辻 正三 1970 依存性テストの検討 東京都立大学人文学報, 77, 17-33.
- 内田圭子 1990 青年の生活感情に関する一研究 教育心理学研究, 38, 117-125.
- 和田 実 1989 ソーシャルサポートに関する一研究 東京学芸大学紀要 1 部門, 40, 23-38.
- 和田 実 1991 対人有能性とソーシャルサポートの関連: 対人的に有能な者はソーシャルサポートを得やすいか? 東京学芸大学紀要 1 部門 42, 183-195.
- 渡辺恵子 1990 自立の概念化の試み 日本女子大学紀要 第一号 創刊号, 189-206.
- Winnicott, D.W. 1965 From Dependence to Independence in the Development of the Individual. In Maturational Processes and the Facilitating Environment. New York: International University Press.
- 山本真理子、松井豊、山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.